

1 記録をとる

同じ場所との関わりを継続的に記録～雑草山～ 3・4・5歳児 社会福祉法人砂原母の会 砂原保育園

子どもたち、園の職員、保護者とみんなで作ってきた雑草山、そこに関わる子どもたちの姿を記録することで、環境の変化とそれを感じ取る子どもたちの姿が把握できた。

砂山にジャガイモを植える



殺風景な砂山に、ジャガイモを植えた。いつもとは違うやり方(半分に切った種イモを通常とは反対の切った面を上にして植える方法)でやることにした。砂山の真ん中に通路を作り、それ以外の全面に植えた。5月に入ってすぐに芽が出てきた。子どもたちはそれぞれに「ここは僕が植えた所だ」と芽を見に行く。

触ってみると「固い」とジャガイモの芽の固さに驚く。5月末にはあっという間に砂山はジャガイモの葉で覆われた。

雑草増やそらプロジェクト (P23)

成長したかまきりの発見



5月の連休が過ぎた頃、子どもたちが孵化するカマキリの赤ちゃんを発見。昨年の5歳児が「森の日」で持ち帰っていたカマキリの卵が虫かごで孵化した。みんなで観察していたが、どうやって飼っていいのか分からない。このままでは共食いするので、二つに分け、虫かごと雑草山に放した。虫かごのカマキリは餌が食べられず全滅してしまった。

しばらくして、子どもたちが少し大きくなったカマキリを発見した。赤ちゃんカマキリが雑草山で生きていた。子どもたちはこのカマキリが卵から孵化したカマキリに違いないと思った。なぜならば、小さな赤ちゃんカマキリは見たことがなかったからだ。保育者は、砂山が雑草山へと変化し、緑が増えたことで、園庭の環境が少しずつ変わってきていると感じた。

カマキリの生態を知る



成長したカマキリの様子、交尾、オスがメスに食べられる様子、2種のカマキリの棲み分けの様子など、自然のありのままの姿を多く見ること・知ることができた。

11月、ハラビロカマキリを手に持ち、登園してきた3歳児のS児に、4歳児T児は、「それは雑草山のカマキリだから逃がしてあげなよ」と説得している。S児「違う！これは雑草山のカマキリじゃない！」と嫌がり、逃がしたくない様子。

T児「違うよ、絶対に雑草山のカマキリだ」

T児も周りの子どもたちも、「そうだ。雑草山は大きな虫かごだから、そこでみんなで飼おうよ」と、言う。(④)

逃がすのを拒んでいたS児も「雑草山は大きな虫かごだから」の言葉をすんなりと受け入れ、自ら雑草山に放しに行くことができた。

雑草山は虫かご



<子どもたちの成長を感じた保育者の思い>

昨年より通っている「森」。初めの頃は虫や草花そのものの興味よりも捕る、摘むということが面白かった子どもたちは、持ち帰っては草花を枯らし、虫はかごに入れたままにして死なせてしまう。この繰り返しだった。本年度、その子どもたちの成長が感じられた。

いつから④のような気持ちが生まれたのだろうか。さらにその言葉が5歳児ではなく、4歳児のT児が発言したことに驚かされてしまった。「森」で持ち帰ったカマキリの卵が保育園で孵化し、雑草山で育った。これまで「森」でしか見られなかったことが、自分たちの手で作った雑草山で見ることができた。だからこそ子どもの口から「雑草山は虫かごだよ」という言葉が自然と出てきたのだろう。

雑草山に関わる子どもたちの姿を長期に亘って記録することにより、環境の変化と共に成長する子どもたちの姿が捉えられています。分析・考察の手がかりとなる子どもの言動を誰の言動か把握することで、一人ひとりの育ちを捉えることが期待できます。